



出会う・つながる・動き出す  
～みんながけやぐ（仲間）青森で～  
参加者レポート@分科会

平成22年11月12日(金)に青森市で行われた全体会の後、午後からは参加者各自が分科会へ移動し、それぞれの地域の活動家の方々と、交流を深めて参りました。ここでは参加された方のレポートを一部ご紹介します。

第1分科会（青森市）  
里山と温泉と海のハーモニー

● 榛名まちづくりネット 芹沢 優

青森大会に参加しようと思立ったのは、東北新幹線全線開通の効果を最大限に享受し、地域資源である歴史・文化・食など青森の特色を活かした多種多様な地域づくり活動の全容を見聞し、今後の活動に活かしたいと思ったからである。また、青森市が山間部と都市部の地域資源を活かした活性化活動、コミュニティビジネスについてどのような取り組みを行っているのか、その実情が知りたかった。

11日の前夜祭は青森の郷土色（食）を活かした豪勢な前夜祭であった。大間マグロの解体ショー、青森ご当地グルメ屋台（B級グルメ）、ねぶた囃子・跳人実演等々大盤振舞いである。

12日の全体会では、津軽三味線全国大会A級チャンピオン3連覇の渋谷和生さんによるエネルギーな迫力のある演奏が行われた。圧巻だったのは「青森検定」である。参加者にいやでも青森を知ってもらおうという仕掛けである。

分科会は、「フロンティアから見つめる時代と未来～交流が生み出す市民のチカラ&旬のおお



【分科会開催地】



もりの美味しい体験～」というテーマを掲げていた第1分科会青森市を選定した。この分科会を主管し、もてなしてくれた「ういむい未来地域協議会」は、平成21年に結成され、NPO 法人あもりNPOサポートセンター（ANPOS）と浪岡王余魚沢地区町内会、青森市の3者で構成され、活動や事業はほとんどANPOSが立案運営しているとのことである。現在、この協議会はANPOSのプロジェクトとして位置づけられて展開している。ANPOSは青森県第1号のNPO法人として1999年1月に設立された。多様な価値観を持ったNPOを支援するために、地域社会の課題解決と青森らしい社会資本の啓発を進めている団体である。活動内容は、NPO法人設立のためのアドバイス、ソーシャルビジネス運営者育成・廃校活用事業、農業参入による農園運営など多岐に渡った事業を展開している。

王余魚沢にある小学校の廃校を活用してのプロジェクトに特化して企画運営しているので、この活動を中心とした内容を体験させていただいた。我々をもてなしてくれたNPOの若いスタッフ10人が、全行程付ききりで世話をしてくれて、感謝の気持ちでいっぱいになった。もてなしの責任者であるNPOの小山内さんは一年間若者を雇い上げ、地域活性化のためのノウハウを実践教育しているとのことである。やはり地域づくりは、人づくりであるという言葉が、強く身にしみた交流研修会であった。また、もう一度原点に立ち返って行動を起こしたいと思う。

第2分科会（弘前市）  
子どもを真ん中においた街・ひろさき

● たかさき女性懇話会 山崎 紫生

弘前市での分科会は、「心で感じ、人々が交わるまちづくり～子どもの文化芸術・育ちを喜び合える感交劇場のまち～」のテーマで、事例発表があった。

「NPO法人弘前こどもコミュニティ・ぴーぷる」は子育て支援の立場から、様々な「子どもを真ん中に置いた中心市街地活性化プロジェクト」



● たかさき女性懇話会 関 良江

私の誕生の町「弘前」。4歳で離れたのだが、一度訪ねて見たいと母と話しながら忙しい日々を過ごしてきたがその母はいない。その機会をやっと得ることができた研修会だった。毎年開催される「地域づくり団体全国研修交流会」に参加しながら期待していた。そんな思いもあり、第2分科会「子供を真ん中においた街・ひろさき」にうれしさも期待を持って参加した。

青森市での全体会は、にぎやかな「津軽三味線」で迎えられた。昼食後バスでそれぞれの分科会に向かう。「第2分科会 子供を真ん中においた街・ひろさき」このテーマにふさわしいステージが待っていた。弘前市の人口は18万人と高崎市の半分だが、コーラス団体が27団体もあると聞いた。その説明の後、5歳の児童から高齢者までで構成するコーラス団体のコーラスが披露された。子供を見守り、子供の育ちを喜び合える地域社会の構築を目指した活動をする、「NPO法人弘前子供コミュニティぴーぷる」のコーラスであった。

また、「国際こども文化芸術交流実行委員会」

をまちづくり事業の一環として実施している。

高崎市の子育て支援グループの活動にも、まちづくりへとつなげる視点を盛り込む必要性を感じた。「国際子ども文化芸術交流実行委員会」の事例からは、異分野の指導者のネットワークの重要性について認識を新たにした。高崎も「音楽のまち」と銘打っているが、群響のほかは、楽器の形の電話ボックスやハープを設置するなどのハードによるまちづくりが目につくばかりで、弘前市のような子供を真ん中においた市民レベルの芸術交流は行われていない。

「子どもを中心にしたまちづくり」という新たな視点からのまちづくりは、本市でも大いに参考になると思った。



などもあり中国・韓国等、子供たちをはじめとした国際交流も盛んである。子供のころからの国際交流の体験は視野も広がり平和への関心の礎になることだと思った。子供を含めた日常の地域活動も盛んで、街づくりの大きな柱になることを実感させられた分科会であった。

高齢社会の中で無縁社会化する地域（町内会）をどう呼び戻すのか、またどう住民をつなげるのか。今、私自身が団地の町内会長をしている立場なので、参考になること大であった。